

研究発表もうしこみフォーム

氏名：島村 一平

氏名のローマ字表記： Shimamura Ippei

所属： 滋賀県立大学 人間文化学部

専門分野： 文化人類学

発表のタイトル：「呪術化した社会主義：モンゴルにおける社会主義期の転生ラマ信仰の事例から」

発表要旨（600字～800字程度）：

モンゴル人民共和国を含む、旧社会主義国圏では、宗教活動の実践が厳しく規制されていたことが知られている。モンゴルにおいて仏教は、1930年代の宗教弾圧時には700以上あった寺院が破壊され、1万人以上のラマが粛清されたとされる。その後、第二次大戦を経てモンゴルは、上座部仏教中心の世界仏教徒連盟（WBF）に対抗するかのようアジア仏教徒平和会議を設立し中心的な役割を果たしており、対外的には仏教実践の促進をサポートする一方で国内的には、寺院の宗教活動を厳しく規制していた。

しかしモンゴルにおいて社会主義時代、仏教実践は全く着せ失せてしまっていたのだろうか？例えば、多くのモンゴル人は社会主義時代もチベット語の名前を還俗ラマたちに名付けてもらうということを実践してきたことは現地ではよく知られている。名づけが一種の呪術的な行為であることはいままでもない。発表者はシャーマニズムの研究を通してシャーマニックな災因論、すなわち病気や災厄の原因を先祖霊に求める考え方が社会主義時代も生き続けた結果、シャーマニズムが命脈を保ってきたことを明らかにしてきた。

そうした中、発表者は昨年、かつて転生ラマが多くいたことで知られるザブハン県での調査を通じて、ラマと経典なき世界で仏教が残した呪術的な発想法が、彼らをして仏教に対する信仰を維持せしめたのではないか、という仮説を得た。つまり宗教的職能者や聖典化された教義といった宗教の制度的側面が否定された結果、むしろ社会主義は宗教の持つ呪術的側面を強化したのではないか、ということである。本発表では、幼少時に転生ラマと認定されながら、還俗し社会主義時代、ネグデルの食料品配給担当者（*agent*）として生き抜いた人物をめぐる人々の回想に耳をすますことで、社会主義時代の「呪術化した仏教実践」について考察していきたい。